宸果

御上不平

# 街上不平

街上不平

土岐哀果

# 街上不平

土岐哀果

世界、
すべてのものは、みな、
われわれのすべてのもの、——
なにびとのものにもあらず、
いかなるただひとりのもちものにもあらず。
しかり、（遠慮すな、）
すべてのものは、みな、
この空氣、
この日光のごとし。

東京　東雲堂發行　一千九百十五年三月

この小著の
一冊を妻に
おくりて、
第三兒の誕
生を記念す

ここに、一千九百十三年夏より十四年冬までの詩作、長短百餘を集めて一冊とす。

この一年半、われにとりて、實に矛盾と動搖と苦悶との期間なりき。しかして、そは今に至るもなほ終らず社會と自己、思想と感情、理論と實行、もし唯だ一方をのみ肯定しうるものあらば、このわが生活を統一なしと思ふべく、もし唯だ一方をのみ否定しうるものあらば、このわが態度を純一ならずと見るべきか。寔にわれは今われの徹せざることをいなむあたはざれども

しかも、この間における苦悶をもつて、ひとへに唯だ劣弱卑小の一存在とのみ思ひなさんことは、われの遂に忍びうるところにあらず。

われは、しばしば勞働の途上に他を憐れみ、書齋にかへりてはわれとわが身を勵ましぬ。憐れまるるもの、他か、勵ますもの、われか。わがいのちの愛は、そのけぢめをもひとつにして、眼前の諸相、身邊の雜事に、あるひは亢奮し、あるひは省察すること、日夜たえず。これ妥協なるか、これ屈從なるか。この矛盾、この動搖、そこに



しも悲痛なる一人の眞實あるをみとめんとするものあらば、われはその手をとりて、わがこれよりのちの一そうの熱意と努力とを告げんとす。

一千九百十五年三月八日夜

哀果生

# 街上不平

## 路ゆく人よ

路ゆく人よ。——

おお、君はなにゆゑに、
しかく汚れたる服をまとひ、
また、君はなにゆゑに、
しかくおづおづとうつむけるや。



ああ、君は働かざるにあらず、
いな、君は一心に働けり、
げに、一心に働けども、働けども、
なほ君はしかく汚れたる服をまとひ、
しかくこころのおづおづとしたるを
なにゆゑぞとはひとたびもいぶからざる
や。

路ゆく人よ。
われまことに君に告ぐ、
君はしかく一心に働くまへに、まづ
まづなにゆゑに君のしかく貧しくいやし
きなるかを思へ。
しかり、なにゆゑに君はしかくいやしく貧
しきや、



それを思へ、
それを今とくと思へかし。
ああ、わが愛する、かなしき路ゆく人よ。

## 乞食の心

追はるれば、追はるるままに、
あわただしく、逃げて、かくれて、
つと、とあるもの蔭に、
（あの巡査の頬ひげのつらの憎さよ。――）
ものものしきサアベルの音、
やり過しては、首すくめ、



あたり見まはし、またもとの、
路ばたの日南（ひなた）にうづくまりて、
右や左のおだんなさま、
ごしんぞさまや、どうぞや、と、
凩のほこりの中にぬかづきて、
追はるれば、また、
追はるるままに、逃げて、かくれて、
かくて朝よりひるとなり、たそがれとなる

もらひ錢。

げに、悲しきは乞食の心なれ。
三日すればやめられぬてふ『職業』の、
そのこころねを憎めかし。
追はるれば、ただ、
かしこよりここに、ここよりかしこに、
ただそのときそのときの安逸に生くるな



る、
あはれ、いざ、その悲しき心を、(かかるわがこ
ころねを)、
今とこしへにさらりと棄てしめよ。

## わかき醫學士よ

然り、わが敬愛する友、わかき醫學士よ、
君は、かの患者に、
まづ、新鮮なる空氣と、
豐富なる滋養物とをあたへざるべからず
といふ。



げに然り、げに然り、
そのことはよく知れり、
かの女が貧血を病み、
かつ今なる月の姙婦なることは、しろうと
のわれも知る、
しかして、その療養の手だてをも知れるな
り。

されど、友よ、
かの女は、かくても、
なほ日ごと日ごと、あくせくとして、
土運ぶ勞働にゆき、
六人の子どもを育て、
はた、更に、
その腕をくぢきて呻ける夫のために、
せめて黄ろき膏藥の一とはりを買はねば



ならず。

ああ、わかき醫學士よ、
いざしばし、その醫學の書を閉ぢて、
われらをして行かしめよ、ともに一日、
かの下谷、芝、四谷、いづれかの——否、
貧しき家、貧しき人はあまりにもおびただ
し。

## 惰けてはあらず

われは惰けてはあらず、
げに、かれらの惰けてあるよりも惰けては
あらず。



## 薄暮

わが心、つと、今、
いきなり、辻にたちて、
『諸君よ！』と叫ばんとしつ、
ばからしく、はては悲しく、
うなだれて、また歩むなり、——
このままに家にかへらむ、

げに、家に待つらむわれを、妻子らはゆふげ
もせずに。



## 出てよ

出でよ、出でよ、わが愛する貧しき人人よ。
いざ早く、うち連れて、
そのくらやみの家をいでよ、
出でてこの白日の大道に立ちならべ。
その痩せ黄ばめる頰、
その汚れくさりし襤褸、

愧づるなかれ、嘆くなかれ、
そはおんみらの今のまことの姿なるを、
しかして、『見よ、われらは皆かくのごと
し、』とよび叫べ。

出でよ、出でよ、わが愛する貧しき人人よ。
臆するなかれ、
こころなき行人(かうじん)の眼にもふれざる



その露路のぬかるみの一廊を出でて來よ、
愧づるなかれ、嘆くなかれ、臆するなかれ、
おんみらはあまりにしり込みし、
うなだれて、もくもくとうめくのみ。

出でよ、出でよ、
そのままの姿もて、いざ。

## 音

しんしんと、夜は寒く、
卓上にこぼれたるたばこの灰の、
疲れたる心に、
わが耳は遠くなりて、
しんしんときこゆるおと。……



金、金、金、……
金、金、金、……

忘れずよ、から風のふきすさぶふか川に、
かの日、救世軍の一士官と見廻りし貧民窟
の、
とんねる長屋のくらやみのぬかるみに立
ちしとき、

しんしんと、げにもこの音を聞きたれ。——

金、金、金、……
金、金、金、……

ああ、この音の、
勞働に疲れたるわが心に、
しんしんとはなれざる悲しさよ、夜は寒く。



## ああ、かれは

ああ、かれは囚へられたり、
ひとかけのパンのために。

ああ、かれはかれのみひとり、
ただかれはかれのみひとり、
『飢ゑたれば、われ、』と叫びて、

かのパンに手をさしのべしそのために、
ああ、ただ、かれはかれひとりしてぬすみた
るそのために、今。



## わがために

わがために機械はめぐり、
わがために空氣は通ひ、
わがために日光はさす。

わがために、
さなり、友よ、

わがために、われらがために、
萬人のさいはひのため、
まことなる生命のため、
このあたらしきわれらの世界の
ああ、聞け、このダイナモの音のよろしさ。



## あぶなし

あぶなし、あぶなし、
わがむすめよ、わが妻よ、
この家をいづることなかれ、
門外に、一歩も。
そこには夢中のサアベルが拔かれ、繩がし

ごかれて、
いつのまにか頬は傷つき、もろ手は縛らる。
おお、われらの未來、われらの生命、
思ふなかれ、思ふなかれ、ぢっとせよ、ぢっと
せよ、
げにもおそろしき日となれり、息をひそめ
て、
ひっそりと、



ここにわれらのあることをすらさとらる
るなかれ。

あぶなし、あぶなし、
わがむすめよ、わが妻よ、
その窓に凭りて、戸外をも見ることなかれ、
あぶなし、門外は今われらの國、——われらの
——。

## 電車にて

罵るなかれ、怒るなかれ、老いたる乘客よ。
車掌はいとすなほに、ねんごろに、
ただふたあし、みあし、中ほどに進みくれよ
とねがひしを。
げに込みあひて入口はあふるるごとし、
今そなたのそこに立てれば、



いくたりはこの寒空に、ふきさらしの、
せまき車掌臺にかがまりて立たねばならず。
そのそこの、そなたのさきより中ほどは冬の日ざしの、
からりと空きて、
つり革も四つ五つ、のんきげに搖れてあらずや。

この一車、乘客は、みな、
おだやかに、速かに、事なく、おのおのの
目的の停留場に達せんことを思へるなれ。
いざすこし、いざすこし、
思へ、わが老いたる人よ。
なんといふことぞ、



ああ、しかくさうざうしく、
いやしげに、罵るなかれ、怒るなかれ、わがい
としき老いたる乘客よ。

## 愛

わが心はいまあらゆるものを愛さんとす。

この街なかの草はら、
うらがれし霜つきのあさの光の、
ぽっかりとあたたかく、
わがくひしろのいそがしきその日のこと



のひとくぎり、
むすめを連れて、
のんびりと、ふところ手してさまよへば。

## 青年として

わが心、青年として、
いつも思ふは、
かの五十年まへの露西亞の青年の、
愛すべくあはれむべき
無智なる民衆の中へ、
その手より飛び來たる石をよけつつ、



街に出で、村に入りし、その悲しきいたましき心なり。
しかも、われ、われは、けふ、
朝より、書齋に、
家のくらしのたすけなるペンをとりつつ、
いま黄昏の、
わが腦のいたさよ、しきりにうづき、

ふらふらとして、外光の、
わづかにのこる落日の、餘光さへ、瞳に痛し。



## エランダにて

銀いろのナイフとフォークの快さよ。——
十一月、外氣は手套(てぶくろ)とりし指にはや冷かなれど、
とろりとして琥珀なすベルモットの濃き
温かさ、いま頬にのぼりて、
くれなゐの絹につつめる電燈のもと、

卓上の菊は恍惚として、球のごとく、鼻さき、
に白く光れり。

このひとさし、このひと片の肉、
そは今、わが舌のうへにかうばしく碎けて、
しづかに食道をすべりつつ、
さはやかに空虛となれる胃ぶくろの中へ
落ちゆく路の、



はつきりと透きこそ見ゆれ——疲れたる
脳より涙の瞼へと流るるごとく。

わらふなかれ、友よ。
埃まみれの一日のつとめを終へて、
都會のそらの、さうざうしく、うつすり赤き
たそがれどき、
われはひとり、かく、このヱランダに來りて、

かく、このやはらかきチェアに凭れて、
かく、この足を膝のうへにくみのせて、
かく、ぢっと、頬杖をつきて、
（おきくさんはかわゆし――）、
このはかなき怡（たの）しみを、日ごと日ごとに、
いな、せめて、一日おきにも持たんとすれど。



## "V NAROD"

ああ、いま革命こそ必要なれ、
この、われみづからに。

げに、そのために、
いざ、われよ、われを愛せよ、
さらば、まことにわが『もの』を愛せよ、

われみづからの感情、われみづからの理想、
われみづからの境遇、われみづからの運命、
われみづからのちから、
しかり、すべてただわれみづからの『もの』
を愛せよ。

ああ、げに、いま革命こそ必要なれ、
かれら、むかしの露西亞の青年の



いたましき民衆の中へゆきしごとく、
われは、今、
われみづから、
この悲しきわれみづからの中にゆかざる
べからず。

## 手

われはつねにまことにわが勞働者のうへに、
一掬の涙を流す、——
その境遇、その運命、
その智識、
その思想、その感情、



しかり、その生活全體のうへに。
されど、また、われはつねにためらひて、
『手をさしいだせ、その手を見せよ。』
かくわれみづからにむかひて叫ぶなり。
手をさしいだせ、その手を見せよ、——
げに、かく叫びて、われは

いささかの躊躇もなく、すこしの愧かしさ
もなく、
このわが兩手をわれとわが面前にさしい
だしうべきか。
ああ、そはあまりに白く、あまりにしなやか
にして、
ただペンを握らんのみのたはやかさなる
を。



おお、われよ、
おんみはかの憐れむべき勞働者のうへに、
一掬の涙を流さんまへに、まづ、
おんみがかれら勞働者とあたたかき、悲し
き握手をなさん時、
かのふとくしてかたき掌(てのひら)の中にへし折ら
れざるほどの、

がんじようにして大きなる手をもたざるべからず。

いざ、われよ、いざ。



## 街に出でよ

街にいでよ、街に出でよ、街には事實あり、おどろくべき、たしかなる事實、目の前にあり、

書齋のなかに眼を瞑りて、さかしげに空想するよりも、まづ、

街にいでよ、街に出でよ、街には事實あり。

## 噂

われは今、噂のなかにあり、——
たれよりたれに語り、たれよりたれに傳へし。

あるひは、つとめをやめたりといひ、
あるひは、さらに他に運動しつつありといひ、



七日休みては一日つとめ、一日つとめては
七日休み、
惰けてなまけて仕やうがなしといふ。

おお、
さらば、この
毎日毎日ちゃんと洋服をきて、

靴をはきて、
電車にのりて、
さだめの時間迄にはかならず事務室にあ
るこのわれ、
このわれみづからは、さらば、何ものぞ。
おもしろし、われは今、噂のなかにあり、
噂は秋かぜのごとし、——



げに、さながらわれはたそがれの秋かぜの
中に立つごとし、
つめたく、ばからしく。

## 書齋にて

わが思想、わがことばの、
すべてそのままわがおこなひとならざる
悲しさよ、
げに空虛なるいのちなれ。——
これやこのわが書齋、



あたらしき書卓に凭りて、
ぱっとあかるき日光の、春も近しや、そよ風、
きのふもとめし一冊の
とびいろしたるかりとぢを
一頁、一頁、
象牙のナイフやはらかに、けばたつ緣(ぢ)も快
く、

"SYNDICALISM AND THE CO-OPERATIVE

COMMONWEALTH."
すぐその下にカッコして、ゴシックのやや
小さく、
"HOW WE SHALL BRING ABOUT THE
REVOLUTION."
まづ讀まんとす、トム・マンの序文の文字の
あざやかに、



むかひあはせの一頁、
ウヰル・ダイソンがペン描きの挿畫は何ぞ、

六尺あまり、たくましき一人の男、
右の手にまるき地球をもちあげて、
左の手にはふとつちょのフロックの
傀儡を指につまみて見つめつつ、
(地球のうへには一人の法服をきたるしら

があたま、
輝くものは法杖か、これ見よと叫ぶはかな
顔、
げに、たくましき四肢五體、腹よりうへはす
はだかの
腕(かひな)や胸のたのもしさ。
ふときヅボンと、大きなる靴はあやしき龜
の子の甲らをしかと踏まへたれ。



わが腦は、この朝の、はつきりと讀みすすむ
いく頁、
やがて、ふと、
いきなりさびしき心もちの何かは知らず
浮びきて、
それよりあとの一行も、身に泌みこまぬも
どかしさ。

レモン茶を、——
湯氣にくもれる銀の匙、おとす砂糖に、
げに、春近き日光のひかりの渦をかきまは
す、新しき香の舌ざはり。

ああ、われよ、
まづしさも、悲しさもなく、



ただ、その日その日の勤めをば無事にをは
りて、
つま子らをかわいがりつつ、老いぼれて死
なんとするか。

かよわくも疲れたるわがからだ、
ああ、わが思想、わがことばの、すべてそのま
ま、

わがおこなひとならざる悲しさよ、
げにも空虛なるわがいのち。——
さはれ、見よ、かくていつまで、
否、否、否、
このままに、いつまでかあらむ。



## 童謠二種

I

びんぼや、びんぼ。
おいらはびんぼ、
おまへもびんぼ、
みんながびんぼ。

びんぼや、びんぼ。

あいつはびんぼ、
こいつもびんぼ、
みんながびんぼ。

びんぼや、びんぼ。



みんながびんぼ、
どうしてびんぼ。

びんぼや、びんぼ。

どうしてびんぼ、
みんながびんぼ、

ふしぎなびんぼ。

びんぼや、びんぼ、
びんぼや、びんぼ。



II

さあ、さあ、みんな手をつなげ、
手をつなげ、手をつなげ、
ずっと、ずっと手をつなげ、
五人、十人、十五人、
百人、千人、千萬人、
手をつなげ、手をつなげ、

かうして、みんな手をつなげ、
しっかりと、しっかりと、
つないだら、はなすな、手をつなげ。



## わが事實

こは、わが事實なり、——
わが空虛、
わが劣弱、
わが怯懦、
わが屈辱、
わが窮迫、

すべてこはわが事實なり、
他のなにびとの事實にもあらず。
よしそこに、さらに空虛に、さらに劣弱に、
さらに怯懦に、さらに屈辱に、
さらに窮迫にある事實ありとも、
それをもてわれとわが事實を蔽ふことあ
たはず。



わが事實は、遂にわが事實なり。
ねがはくはわれをして、わが事實を衷心よ
り惡ましめよ。
しかり、しかして、そをみづから容るし、みづ
から慰めんとする。
虛榮のこころを衷心より恐れしめよ。

## おもちゃを手にとりて

ちょいと貸せ、むすめよ、
ほんたうにおもしろきおもちゃなれ、
ぐつとおさへて、つとはなす手の下に、いき
なりくびをもたぐる猫。
おお、この猫の顔の泣きわらひよ、



おさへられては、もたげ、
もたげては、おさへられ、
ちいさなる手の下に、いくたびくびをもた
ぐれど、
さておもひきつて箱をとびいでぬ運命の、
この猫の顔ぞかなしけれ。
さあ、むすめよ、

もっと遊べ、もっと遊べ、ぐっとおさへよ、
げに、おもしろき、
(むすめよ)、
さあ父も、ともに遊ばむ、この猫のおもちゃ
のおもしろさ、
げにほんたうにおもしろし。



## 號外

今まさに、號外は發行せられんとす、窓に凭
れば、
そこの地上の日だまりに、
かくもいづこより集れる、
きたなき顔にふる帽の、腰の鈴のちんかん
と、

わらぢの紐の泥にまみれて、
今まさに、ああら、わが號外の發行を待つ人
人よ。
おお、四方へ八方へ、
今まさに、走り、さけび、手をふりて、
ああら、わが號外に街上をさわがさん人人
よ。



されど見よ、
悲しきはおんみらなれ、
今まさに、發行せられんとする號外の、その
内容を。——
この事實、
かの事實、
ああ、かくて、
この事實によりておんみらの貧しさ、いや

しさはすこしも變らず。
この『天下の一大事』は、おんみら自身にとりて、ほとんど何の係はりもなし。

やよひの雨つめたく落ち、
ゆふばえの空、西に遠く、
あかしあの樹の葉はみどりに、
電車、自働車……せはしげにゆききする



都市居住者、
新しき白れんぐわの交番のまへに、しょん
ぼりとわかき巡査が佇み、
薄らあかりのどよめきの中をながるる、町
なかの濁れる河。

ああ、おんみらと、われらと、
かくは何のために忙しく、

かくは何のために疲れたる。

ああ、おんみらと、われらと、
われらのために、おんみらのために、
人としてのすべての生命と力とのために、
ここにいつの日かいかなる事實をもち來
たすべきぞ。



## 會合

いざ、立ちいでずや、同志よ。
さなり、かしこの時計臺の、十一時はよほど
まへの靄に響けり。
春の夜のすとうぶはとろとろと外套の背
に汗ばみ、
卓布(テーブル・クロス)のあかと白とに、たばこの灰のうつす

りとちり零れて、
菓子皿と珈琲碗のみうづだかく、
ともすればその辺りくづれんとする一隅
の、
われははや眠たし、（つまらなし。）
いざ、立ちいでん、同志よ。
われとても、もとより、いまも、



一夜を徹して語りあかさん自由と勇氣と
のなきにあらず、
否、むしろ、いまもそをこよなき愉快として、
このあたらしきカフエのゼランダに、
しののめ、語り倦みてほのぼのとわかれん
ことのたのしけれど、
されど、同士よ、
つくづくとわれは悲し、しみじみとわれは

寂し、
われらは、いつしかに、遂に、
たがひにその當面の必要と眞實とを語ら
ずなりぬ。
さらば。——



## 一青年に

まことにおんみは貧し、
そのきもの、その顏、そのからだ、
われももとより貧しけれど、おんみは今わ
れよりも貧し。
思へば、おんみがただ一圖に東京に來りた

る心は悲し。

かくて、三日また七日、

おんみは働かんとすれど、働くべきところなく、

遂に貧しく、この見も知らざるわれを訪ひ來りて、

ふたたび貧しく郷里にはかへらんとす。



よし、さらば今、おんみの言ふままにあたふべし、

そはまことにわづかなれど、

おんみにとりても、またわれにとりても、

しかもいたづらにして手にしうべきにあらざるを思へ。

はた、わが友よ、

さらにわれらは思はざるべからず
このわがあたへたるは、よしはづかなりとも、
そはただ貧しきおんみが貧しきわれより
持ちゆくに過ぎざるを。
しかして、この夜、
おんみが再び郷里に入らんとき、
おんみはまたもとの貧しき生存に過ぎざ



るべきを。
ああ、われは、おんみの郷里のいづこにある
か、
おんみの肉身のいかなるか、
はた、おんみみづからの境遇のまことにい
かなるかを知らざれど、
ただ、たしかにこの一事を知る、——
おんみがかくのごとくにしていつまでも

常に貧しき生存にてあるべきを。

さらば、
願くばわれらふたたび窮迫の中にめぐり
遭はざらむ、
健かなれ。



## 蟻

家のなかへ、
蟻がはいつて來て、こまります。

手水ばちのそばの土臺石から、
えんがはの隅の柱をのぼつて、
あくせく、

ぞろぞろと這つてくるのです。

實に、こまります、——

見つけるたんびに指でひねりつぶします

が、

とても追ひつかないので、

濡れたぞうきんで、ずらりと拭きとると、

それでもダメです、



二匹や三匹は死にますが、

おほくは、また、

赤黒くぴくぴくと手や足をおしもんで、

もだえながら、生きかへるのです。

おや、ここにも、

あら、ここにも、まあ！

とだなでも、茶だんすでも、

あまいものさへあれば、どんな高いところ
でも、
どんな遠いところでも。
女中のこぼした砂糖のこなに、
むすめのつぶしたボンボンの汁に、
中元のおしるしの羊羹のはこ、
その人のかへつたあとで、すぐ、きらうとす



ると、
もう、その中に、うようようとたかつてゐるの
です。
おもひついて、
母の來たときに、
たばこのこなをもらつて、
その土臺石の柱の隅に撒きましたら、

しばらくはあがつてきませんでしたが、
まもなく、また、
路をかへて、そこにも、ここにも。
まつたく手におへません！
しかし、蟻にとつては、ここが、
ひとの家だから這入つてはいかん……



そんなわけはないのですからね、——
ただ、あまいものを口にいれるためには、ど
んなところでも、
かつてに這つてかまはないのですから。
ひねりつぶす指、濡れたぞうきん、かれらに
とつて、
これほど無法な、けしからんものはないで

せう。

とはいへ、
ほんたうにこまりますね、
家のなかへ蟻の這入つてくるのは！
べつにわれわれ人間に害をするのではあ
りませんけれど、
氣もちがわるくて、たまりません。



『こりゃね、』と、ぼくは、かないに言ひました、
『あまいものを一さい家の中におかないに
かぎる――』
かないは、『でも、』と、
ばかなことを言ふといふやうな顏をして、
『そんなことはとてもできませんわ、』と言
ひました。

手のつけやうがありません！
それで、
いまでも、やはり、あひかはらず、
家の中へ、
蟻が這入つて來て、こまつてゐます、
なにか、うまいくふうはないでせうかねえ。



## みんな一しょに

おれはおれだ、
おれはおれひとり働いてゐればいいのだ、
さう思つてゐた。
しかし、いつまでもAは遊んでゐる、Bもな
まけてゐる、

Cもなんにもしない。

おれだけが働いてゐるわけがない。

みんな一しょに働かなければならない、

かれらを働かせなければならない、

健かに働けるやうにしよう、



ここを快く働けるところにしよう。

みんなが一しょに、健かに、こころよく、

おれは働く。

## 都會小情 六種

### I 玉蜀黍

わが家の近くには、貧乏なる人が多し。
（われもそのひとりなるが。――）
ある朝、めしの時、妻のはなしに、



あの角の車屋のうちにては米のかはりに、
二日つづけて、戸をしめて、たうもろこしを
喰べたるに、
その子どもたちの、あたまにも、顔にも、から
だにも、
一面にできものができて、
赤くくづれて、
それはそれはかわいさうになりたりと、

裏のうちの人が言ひたりといふ。
それはまことにあはれなり、たうもろこし
を、
米のかはりに、
二日つづけて喰べれば、をさなき子どもた
ちの、
赤くいたましく、できものにくるしむもの



か。
わが家も貧乏なれど、
かかることは、はじめて知りたり。
ほかにも知らざる人のあらんかと、
このことを世の中に告ぐ。

## II 面會

Tさん、御面會……

事務の給仕の青ぶくれ、
とんきょう聲のをかしさよ、
午後四時過ぎのけだるさよ。



めいしを見れば、これやこの、
金の無心の、月末の、
あふまでもなく。——

かのふとき眉、くろき顔、
よごれなえたる白ゆかたに、
けふも草履のすはだしか。

ゐないと言へと追ひかへす、つれなきこと
と思へども、
しかしながら、
われも悲しや、口さびしさに、
いまもいまとて、ひるめしとも、
ゆふめしともつかぬうどんふたつのやく
みの葱の
歯にはさまりしきみわるさ、



（許せよ）、——
指につまめど、指につまめど、
さっきよりよういにとれぬもどかしさ。

## III 黄昏

火が出る、火が出る、青い火が出る、——
いきなり、そうぞうしく、
としよりの叫びごゑ、うらの家。
庭下駄をはいて見にゆけば、
それ、そこの



庇がくれの電線より、
なるほど、
黄昏のうすくらがりに、ちきちきと、
火が出る、火が出る、青い火が出る。——
いま張板をしまはんと、
つと仰ぎしゆふ空に、……

どやどやと、
日のくれの人の心に、
おかみさん、わんぱく、おちゃっぴいのここ
ろに、
おそろしく流れくる、こげくさき——燒跡の
——にほひ。

妻に電話をかけさせて、



書齋に入れば、會社より、
時をうつさず、職工の提灯の影、ごうま聲、
かなづちの音、
窓にさす月のひかりも秋近し。

そのあくる朝、うらの家のとしよりの來て、
くれたるは、
はやむらさきに色づきし白いちじゆく、

あまくはなけれど、はつものの、白いちじゆくの禮ごころ。



## IV 錢

わが生れたる淺草の家の近くに、
寺の娘にて、
いつも錢のことを「お化け、お化け」と呼びたりし娘のありき。

その娘は寺に嫁ぎしが、あくる年、

夫がへいたいにとられしより、
さびしく佛のそばにゐのこりて、
二年たちしに、
夫はかりそめの病ひにかかりて、
遂に衞戍病院にて死にたりといふ。
このわかき夫婦の運命はまことに憐れなれど、



それよりも、
われの今ふと思ひいだせしは、その娘のまだ七つか八つなりしころ、
錢のことを「お化け、お化け」と呼びたりしそのことなり。
「お化け」とは、たれのをしへし名なりけむ、
その娘、

やもめぐらしのあけくれに、今、
錢のことを「お化け、お化け」と呼びたりし、い
とけなき日の、
さるつまらなき記憶など、ありやあらずや。



V 軍艦常磐にて

すぱすぱと茄子をきり、芋をきり、肉をきる、
その庖丁のきれあぢよ、その手つきのブキ
チョさよ。
デッキより脚下(あしもと)の圓き穴をのぞけば、
その下の、

浪のひかりのあかるき厨房に、
當番の水兵達、いま、晝めしの菜をつくれり。
すぱすぱと、何か低聲に、
いさましき軍歌らしきをうたひつつ、
敵の首とは似もつかぬ小さき茄子や芋を
きりて、
だいの男がのんきさうにたべ物をつくる



悲しみよ。

戰鬪射擊のけんぶつに、一記者として、乘
り込みつ、
朝はやくよりたちづめの
足は疲れて棒のごとし、館山沖の秋の風。

## VI 顔

はて、思ひだされずよ、あの顔、——
いま行きずりにむかうより、
にっこりとして帽とりし、
あのおほ男の、見あぐるばかりの。——
クリスマスも近づきて、



この街のけいきのよさよ、——おお、それよ、
あの顔は、きのふ訪ねし遞信局の、
事務室のだだぴろく、うすぐらく、
よく見えざりし、しんせつに話してくれし
課長の顔。
ああ、また、
知らぬひとりに見おぼえられし

このわが顔の――わが職業の悲しみよ。
外套のえりを立つれば、黄昏の、
ぱっとあかるく灯ともりて、風寒く、
きらきらと、何ごとぞ、われながらばからし
き涙かな。



## 朝

風、――
寝ざめの肌のべっとりと、なまあたたかき
三月の
しらちゃけし日光の瞳にしぶく。
新聞をひろげんとして、

そのとき、
ポ、ポ、ポ、ポ、ポ、ポと、しめりたる朝の空氣に、
ひびきわたり、ふるへかすする汽笛のおと、
(品川の海は濁りてあるならむ、)
芝浦製作所の、午前六時四十五分の汽笛の
おと。
あはれ、今、この音の、
いそいそと仕事服にきかへんとする職工



の心のうへに、
とぼとぼと辨當を抱へつつ、まだゆきつか
ぬ事務員のこころの上に、
さては、かの、家にのこりて內職にとりかか
る妻子(つまこ)らの心のうへに。
二面にはしなびたるO——の顏、
これやこのこの國の、新しき文部大臣、

寫眞版よくつかず、ぼんやりと眼も鼻もなし。



## 途上

おお、ここに、あたらしく造られし、
この市街公園の一廓(くわく)、——
十字路の風は四方にふきめぐり、
埃はさつと、
のりかへの電車まつ間(ま)のさびしさに、入り
て歩めば、

わが心、いよいよ悲し、しきつめし小石の路に、
かた隅の遊動木に、ぶらんこに、
そこの煉瓦のひと構へ、印刷工場の職工の、
ひるの食後の數分を、
春もやよひの日光のきらきらとかがやく
中に、
球を投げ、追ひすがり、もたれかかり、



鈴のにほひ青じろき男と女、
めまぐるしくもわらひ、怒り、さざめき、さけび……
やがて今、かんかんと鈴(ベル)がなり、しきりになれば、
ぞろぞろと、ひとしきり、かれら去りゆき、
おほぞらはほんのりとみどりに霞み、

わが心、ますます悲し、——
ああ、かれら、なんにも知らず。



## それ、音がする

それ、音がする、——
ぱた、ぱた、ぱた、と、あのおとは
モーターボートか、飛行機か、
どんよりとした炎天の
庇はづれのまつぴるま、
ぎらぎらと照る光の中に。

さあ、さあ、早く、おきて見る、
何が來たのか——何でもいいから立つてゆけ、
何でもみようと思はぬものは、
何でもえようと思はぬものは、
大事な一生をムダにする、
バカで、貧乏で、くだらなく。



それ音がする、音がする、——
さあ、さあ、早く、おきて見ろ、
ごろごろせずに、おきて見ろ。

## リ博士の死

ああ、
彼は殺すべくして彼を殺し、
彼は殺さるべくして彼に殺されたり。
殺したるもの、その心は悲し、
殺されたるもの、その心は悲し。



事は一千九百十四年八月十五日、
獨逸社會黨の首領、博士リーブクネヒト、
歐洲未曾有の渦亂、こんとしておこれ
るとき、
軍隊の服務を拒みたるゆゑをもて、
カイゼルのために、
銃殺の刑をうく。

ああ、
彼は殺すべくして遂に殺し、
彼は殺さるべくして遂に殺さる。
しばらく今、われをして
カイゼルの地位と、
リーブクネヒトの主義とにつきて、論ずる
ことなからしめよ、
しかり、ただ、ここに、



殺すべくして殺し、殺さるべくして殺され
たる
一ありて二なき兩者の運命と、
その行爲のまへに、まづ、
慘として拜跪せんとす、——
げにもこの平凡にして、無力無智なる、日本
の職業者、われ。

## 戰報

また來たり、また來たる
ロイテルの電文の
コンマもペリオドもなく、
うす青き謄寫鉛筆のものものしさ、ただた
どしさ、——
げにヨオロッパ空前の戰亂、——全世界の



人類の運命は、ずらずらと並びたる文字の
間に、
こんとんたる現在と、はてしなき將來の、
讀みかへせど、讀みかへせど、
解きがたきいくところ。
一勝、
一敗、

一喜、
一憂、
A、B、C、
X、Y、Z、——
呼吸(いき)もくるしき午後四時の
むし暑さ、せわしさ、
兵火の中の村邑の
ぎらぎらとして疲れたる瞳(ひとみ)のまへ、地圖の



上。

EとOとのあやまりか、——
やつと探せば、國境に、づつとはなれし南方
の
さもしづかなる海岸の
途方もなき温泉場。——

これや、温泉、――なつかしや、いかにあるらむ、
たびの夜の、
かのみじか夜のほのぐらき二階のてすり、
まんまるな頬の汗ばみて、
ゆかたに更へし胸のあたり、
まだうひうひしく、健かな……
（ピンとはねたるカイゼル髯）――
あはれ、この掌中（てのひら）にあかず愛でつる



くろ髪も、しろきうなじも、
おもへば、遠く、……
この一字、字びきにも、どうしてもなし。

## 繫累

おもへば、いまさらに
まつはれるもののおほさよ、
すてえざることのおびただしさよ、
わが周圍、わが身邊に。
まつたく、



行くとすれば、いつ歸るともさだめがたき
　　從軍の
一記者として、——
としよりの母はあす死ぬともわからず、
いたいけのむすめの顏、
みごもれる妻のやつれ、
むすこのゆくへにそぞろなる姉の嘆きも、
兄の憤りも、

げに、うるさき肉身の、はてしなく、
頼まれしごとは、まだ、どれもこれも、
（いくらにもならぬペンさきの、くらしのたしの、）
まだ、ひとつとして手をつけぬ忙しさ。
天上天下、一介の書生なるぶんざいに、
わかきみそらに、



なんといふ不自由さぞ、
あはれ、この一家をもてる青年のいとしさ
よ、われながら。

## 用事

ごうあつてもせねばならぬしごとをまん
なかにおきて、
わがこころはそのまはりをどうどうめぐ
りす、——
恐ろしく、もどかしく、ばからしく、いそがし
く。



ああ、いまは中學生の、かの公園の
『地球廻り』につかまれるごとし、
はんどうのつきたるわがからだは空氣の
中を、
遠く、高く、——
手をはなすにもはなされず、——しごとのま
はりを、

眼がまはる、
眼がまはる。……



## あるとき

ぎゆつと摑んでゐる愉快さよ。
あのをとこのえりくびを。
われはぢつと見てゐたり、
だまつて、今日まで。

こんなときにはこんなことを言ひ、
こんなときにはこんなことを爲し、
こんなときにはこんな顔をする、——
すべて、われは見てゐたり、その間(あひだ)に。

試みに、われ、
その時と、ばあひを作れば、
その言ふこと、その爲すこと、



その顔の筋肉も、いろも、かたちも、
われの想ふそのままなるおもしろさよ、——
いまも然りき。

憫れにも、をかし、
あのだいのをとこは今こそわれの手の中
にあれ。

## 食客

みつき、いつつき、
おんみはなほわが家にあり。
わが家におんみのあることはかまはねど、
さんどさんどのくひしろはいくらにても
なけれど、



せめてはあほむけに新聞をよむそのひま
に、
食後の椅子のまきたばこ、煙(けむ)を環にふくそ
のひまに、
まづこの事をかんがへよ、——
おんみも、われも、おなじ一人の男として、
いかなれば、
おんみのわれに養はれねばならぬそのこ

とを。



## 書齋にて

おれはいつまで、
こつこつと、このペンを
握つてゐるのか。——

そよりとも
風のなき

まつぴるま、
書齋の中、

むかうの病院の二階には、藥局生が
はだをぬいで、
何か談してはわらつてゐる、
さもあんかんと、
どの顔もひとり身らしきのんきさに、



のらりくらりと、
もぞくさと、
ごろごろと、
どこかさもしく、
ばからしく、もつたいなく。

## 絶叫

おい、
おれの聲が聞えないのか、
おまへには聞えないのか。
おれはさつきから叫んでゐる、
氣のちがふほど叫んでゐる。



何といふへいきな顔だ、——
おい、
おい、
おれの聲が聞えないのか、
このおれの聲がおまへには聞えないのか。
え、

おれのひとりごとだ？
ひとりごとを叫んでゐるのだ？
おれの獨語（ひとりごと）、——
だが、
何とかいつてくれ、
おい、
何とかいつてくれ、何とか。……



何といふへいきな顔だ、
おい、
おい、
どうかしてくれ、どうかしてくれ。
おい。

## 陸橋にて

われは愕きて、佇めり、
いそがしくわたらんとせる陸橋のうへ。
見よ、かしこに、今、
一りやうの汽罐車、
まんまるき一廓のあなの中、



鐵路の上に、
おもむろに動きて、
やがてまったく方嚮をかへをはりぬ。
いかにたやすく方嚮をかへをはりしよ、……
……
ただ一人の職工の桿のまにまに、
おともなく、

ああ、げに事もなげに、しかも、まったく、——
もうもうとのぼる煤煙。
いかにまったく方嚮をかへをはることの
たやすげなる。——
われとわが身をしみじみと、
かんがふるひまさへあらぬこの日ごろの、
朝は、はやく、



よるは晩く、
やすむまもなきいとしさ。
退きもせず、進みもせず、いくとせか、ただ、
おなじつとめにあくせくと、おなじこころ
に、
さもあらばあれ、かくあれば、ともかくも、や
すらかなる月月の
くらしのままに、

くだらなく、貧しく、さもしく、——
くだらなし、貧し、さもしといふことも思は
ずなりて、
遂にわれ、いかになるらむ、——このままに、
このままにして。

もうもうたる……
陸橋のてすりをしかとおさへつつ、



煤煙の中、
さんさんとして、炎天のひかりの下に、
おお、われよ、涙を流すか。

## 齒

ドクトルはだまりこくつて、
きらきらと、ヤットコを、今、
わが口の中へおし込む。

ぬらぬらとはれたる齒ぐきの、
注射のあとのうすら眠たさ、——



ぽきりと、
痛と思ふまもなし、眼にたまる涙。

ぐずぐずと口をそそげば、銀製の
啖壺のふち、
めちゃくちゃに汚ならしく蝕ひし、
血みどろの、
『痛みしはこれか、この惡魔！』

これやこの
いまが今まで苦しめし
わが肉身のひとかけか。

ぺっぺっと、憎らしく、
はた、いとほしく、
そのうへに唾を吐きかく。



## PETIT BOURGEOIS

あたらしいガス・ストウブの
ちらちらとあったかい銀いろを跨いで、
運動椅子のうすら眠たさ。
膝にこぼれた葉莨の灰をはたかうとして、
ッ……

ふくらっぱぎの――火か水か、
ぴりぴりと黄ろくこげた肉のにほひ。
ブ！
おい、やめてくれ、
そのすましたのつぺりとした心もち。
痛いか、ぴりぴりするか、おい、おれ自身よ、
ホンのすこし金廻りがよいとて、



近ごろとのへた書齋の中に、
ばかな、
痛快なガス・ストウブに嗤はれた
このおれ自身の『プチ・ブルヂョワ』！

イット、イズ、エ、ドッグ、——
イット、それは、
イズ、ある、
エ、ひとつの、
ドッグ、犬。



それはひとつの犬である。
いかにも、これはひとつの犬である。
だれが見てもその通りだ。
シー、ゼ、ボーイ、エンド、ゼ、ドッグ。——
シーは、見よ、
ボーイは、こども、

エンド、そうして、
ドッグ、犬。

こどもと、そうして犬を見よ。
だれが讀んでもその通りだ。

ゼ、ボーイ、エンド、ゼ、ドッグ、ラン。——
ランは、走る、——



こどもと、そうして犬が走る。
なるほど、こどもと犬とが走つてゐる。

さうさう、
その通りおぼえればいい、
それだけをおぼえればいい、
ほかのことはおぼえるな——

おぼえても、口にはいふな、わが愛するこゝも達よ。



## 自己

われはみづからわれの力を信ず、
また、われはみづからわれの足らざるところを知れり。

ふかく信じ、はた、よく知る、
それゆゑにわれはつよく、

それゆゑにわれはつつましし。

おお、
われを罵るものよ、
われを讃むるものよ、
われはここにあり、儼としてあり、
おんみらの聲なくとも、
われはよく知る、



おんみらの聲ありとも、
われの信ずるところはたやすく渝(かは)るべか
らず。

謝す、
われは常につよく、
はた、つねにつつましくあらむ、
かくして、われは大きく、

はた、かくしてわれのいのちは限りなくお
ひたつべし。



# 身邊近事

つと、
すひがらを投ぐれば、そこに
赤黑き、小さき蟻ありて、逃ぐるなりけり。



汗みどろの
顏をふりむけて、炎天の
荷ぐるまひきがわれをば見たり。

路ばたの糞の蠅、
わが肩に一匹つき來て、
拂へど、拂へど、はなれゆかず。



わが職業の
はつ冬の路に、ふとさびしく
病むと聞きしを思ひいでにし。

Hの病床にて(六首)

襖のそなたに
そのひとは今病める頬によそほひすらむ、
われに逢はんため。



生きむ、生きむ――それのみのわが
四五年を
君はしづかに病みてありしかな。

おもひしより君はやつれず、
健かに
ありとおもふわれのさびしくなりぬ。



そのむかしの
少年のわれを、君は悲し、
病みつつもなほおぼえてをりし。

君が家を出でて坂路、——
五反田の
稲の穂は黄ばみ、君は病めるなり。



どうにか、
どうにかせねばならなくに、
また、働きて金とれるかも。

わが職業は乞食のごとし。
どんよりと
曇れる冬の空の下にして。



晝近く
すこしけだるくなるころを
つとめに出づる、冬となれりけり。

叱りつけしきうじの顔の
いとしくなりて、
かがまりをりぬ、すとうぶの前に。



ひとところ銅(あかがね)いろにはげたる雲あり、
冬のくもり日の、
こころむづかし。

むすめを
叱りてすぐに立ちいでし
この黄昏の家路なるかも、



わが知れる青年はみな貧し、
かれも、かれも、
わが知れる青年はみな貧し、冬。

妻子(つまこ)らと
冬枯れの花壇をとりこぼち、
焚火しをれば、日のあたりきぬ。



たばこの煙(けむ)の眼にしみて、
はてしなく
冬の夜の涙のにじむなるかも。

しんしんと
雪のふるような心もち、
けふも身うちを這へるなりけり。



歸らんとすれば、遠く、
警鐘のおとの、そら耳、
冬の夜勤を悲しめりけり。

わが世過ぎの、今
さまでにくるしくあらぬまに、
一生の事業をせんと思ふぞ。



黄昏の心は、しみじみと、
やねのむかうの
ふゆ枯れの枝をへし折りをりし。

なさけなきわがあたまかな、とつぶやきて、
書齋をいでて、
むすめと遊ぶ。



ものを拾はず、
まことにものを拾はずよ、
しみじみと地上を見ることもなし。

勤むれば、はかなし、——
やうやう倦めば、あたらしく
また忙がしくなれりけるかも。



惰けろ、
もっと惰けろと呟きつつ、
働くかなや、きのふも、けふも。

めづらしく
この冬ぞらの、ほのぼのと
いまだあかるき家にかへりつ。



ほっかりと、この
輪轉機のぬくみの懷かしさよ、
あすの新聞に灯のともる時。

このごろ、すこし、
くらしのらくになりたるに、
したしくぞ思ふ、妻子の顔を。



ぷろぺらの響遠のき、
この冬の、
貧しき朝とまたなれりけり。

その角を、いつも
まがればそこに、人妻の
犬と遊べるたそがれの冬。



金ほし、——
ほしけれどまたこのごろの
あくせくとせざる心いとしも。

わが傍(かたはら)に、
鉢の梅あり、ほのぼのと、
わが傍に鉢の梅ありにけり。



ゆらゆらと、この
指に燃ゆる燐(ま)寸(ち)の火の
おもしろきかも、冬の日なたに。

さまざまに
顔をちがへて語りたれ、
けふも四五人の訪づねきたりし。



わが靴の
いま穿かんとするつややかさ、
晝近き冬の日のひかりかも。

近みちの
露路を通れば、ひえびえと
まひるの風のふきてをり、冬。



心しばらくただおちゐざり、卓上の
ひとたばの中の
一葉のはがきに。

やうやうに、かれにも職を
さがしたり、
この冬の日は暮れにたりけり。



憎として
耳遠くなり、灯ともりぬ、
この忙がしき一隅の椅子。

いつしか、いつしか、
背ぐくまりつつ、卓にをり、
われにかへりては悲しめるかな。



ふろしきを
ぢつと抱へて、われとわれを
ぢつと抱へて、歸りなんとす。

このごろの
わが周圍のひそひその
おなじ不平をいとしめりけり。



あはれ、いまだ
この街かどの、
このあたらしき公園に入りてもみざる。

われを
えらしと思へるもののために
えらくならんとおもひけるかも。



商人になりなんとして
七日ほど
思ひつめたるいとしき心。

のびのびと、日南にゐたれ、
いつしかに日のかぎれるに、
いとしきは妻子。



ふと
わが家の門のあきたる音、
しんしんと冬の夜を寒みかも。

このからだ、
このこころさへ、この日ごろの、
忙がしさ、さびしさ、かりもののごとし。



はやも寢て、頰ぞあかあかと、
わが子らの健かさかも、
かへり來たれば。

むすめらは
庭の莚に遊ぶなれ、
冬の日光のありがたさかも。



あまりに貧し、
あまりに貧しき人人を遂に憎めり、
何にも知らず。

貧民窟巡察（二十二首）

諦めて、諦めて、
ただ諦めて、不平も言はず、
何にも知らず。



ざくざくとこくそを踏めば靴痛し、
この一廊の冬、
何にも知らず。

じめじめと
この泥濘路のくらやみに、人間住めり、
何にも知らず。



眼のふちに、あかき涙の流るれど、
しょぼしょぼとして、
何にも知らず。

金をくれ、金をくれ、——
いきなり、くらきとんねるの中、
何にも知らず。



金をくれ、おつかあ！
金をくれ、金をくれと泣けり、
何にも知らず。

泣くな、泣くな、
顔いちめんのできものの赤くはれぼたく、
何にも知らず。



つくづくと覗けば隅のくらがりに、
影が禮(いや)すれ、
何にも知らず。

籐表(ゝおもて)をみっつつくれば日が暮れぬ、
けふの日が暮れぬ、
何にも知らず。



どん隅のおんぼろ厠(かはや)、
糞みづに落日(いりひ)がさせり、
何にも知らず。

まつぴるまのうすくらやみの天井に、
らんぷ黄ろく、
何にも知らず。



石炭屑ひろひ集めて
水そそぐ、たそがれの中、
何にも知らず。

父と子と喰ひつくやうに抱(いだ)きあひ、
ゆふ日あかあかく、
何にも知らず。



このあたり養魚池なりし、
しらじらと草がかれたり、
何にも知らず。

はめ板を掩へる幌に、しんしんと
冬の日があたり、
何にも知らず。



おやが挽けば子があとを押し、
から風のたそがれとなり、
何にも知らず。

あかあかと竈(へつつひ)に火がもゆるなれ、
婆(はゝ)さんがひとり、
何にも知らず。



これがこれ生きた人間の顔かもよ、
あをじろく、あをじろく、
何にも知らず。

ぞろぞろとあとを趁きて、
きたならしくはなれ行かぬ子どもら、
何にも知らず。



おもひきり惰けもえせず、
働けばいよいよ貧し、
何にも知らず。

日光のあかるさ、あたたかさ、
そは萬人のうへにこそあれ、
何にも知らず。



（すぐ、ゆけ）、——
海のひかり、つと浮び、
柳のみどり、かがやきにけり。

沼津特派（二十首）

あわただしく乗れるかた隅、
青麥に、
やがて眠たくなれりけるかも。



しみじみと凭れる車窓に、
東京の
さくらは遠くなれりけるかも。

さくさくと
やがて嚙める林檎に、
ふと石油の香を嚙めりけり。



そこ　なく
むっと貧しき人いきれ、
この一室の春のひかりに。

連山に
いちめんにかがやく四月の雪、
職業といふものの變へがたきかも。



やつぱり、われ、
働かずにはをられざる、
かくてさもしくならんとするも。

このしづかな
浪うち際の衞舍の
春のゆふ日に佇む巡査。



こそこそと
岩にかくれし蟹のやつ、
まったく岩になれりしごとし。

いくさ艦、ま近かに浮び、
この濱邊、
まづしきはわれのめしの代(しろ)かも。



むっとして
わが職業を怒りたれ、
伊豆の山邊の月夜の山火事。

ほのぼのと
砂濱を踏むわれの靴、
あんまりひとり働くなかれ。



しののめの海のひかりに
まつくろき
ネクタイをきゅと結ぶなりけり。

この春の夜の
まっ正面に富士は見え、
わが貧しさを、しかも忘れず。



しっとりと
肌に埃のかはきたる、
春の月夜となれりけるかも。

海のひかりが
はつきりと瞳に泌む、
このあかつきのぶらんこの上。



わが掌(てのひら)のほの白く、
よわよわしきからだが悲し、
春の月夜に。

よぼよぼと車は走り、
この春の夜、
富士のたかねに雪の光るも。



春、月夜、
浪よけ堤、ゆきゆきて、
いつか渚になりゐたるかも。

備はれて、使はれてをり、
この海邊の
まよなかの春のいちめんの靄。



いまは、遂に、
どうでもよくなくなれり、
すべてのひとの顔がなつかし。

そんなことではダメだと叱り
かへしたる
青年のあとに、なぐさむ心。



石川はえらかつたな、と
おちつけば、
しみじみとして思ふなり、今も。

ぐんぐんとあせる心に、
いそがしき
よわきからだを悲しめるかな。



かへり路、
ちょいとカフェへよることも、
このごろ倦きて、またもさびしも。

むっつりとかれは働く、
むっつりと
その傍に、われ、近づきにけり。



かの顔を打たんとしたれ、
やがて、また
わが手のひらをいとしめりけり。

かの顔を遂に怖れつ、
かの顔は
ぽつねんと惰けてあり、われらの中に。

# 目次

（カッコの内は制作の年月を示す）

序詩

路ゆく人よ（'13, 11）

乞食の心（'13, 11）

わかき醫學士よ（'13, 11）

惰けてはあらず（'13, 11）



薄暮（'13, 11）

出でよ（'14, 2）

音（'14, 2）

ああ、かれは（'14, 2）

わがために（'14, 2）

あぶなし（'14, 2）

電車にて（'13, 11）

愛（'13, 11）

青年として（'13, 11）

エランがにて　('13, 11)
"V NAROD"　('13, 12)
手　('13, 12)
街に出でゝ　('13, 12)
噂　('13, 12)
書齋にて　('14, 2)
童謠二種
　びんぼやびんぼ　('14, 3)
　きあきあかんな手をつなげ　('14, 3)



わが事實　('14, 4)
おもちやを手にとりて　('14, 4)
號外　('14, 3)
會合　('14, 4)
一青年に　('14, 4)
蟻　('13, 7)
みんなゝとゝもに　('13, 10)
都會小情
　I 玉蜀黍　('13, 9)

II 面會 ('13, 9)
III 黄昏 ('13, 9)
IV 錢 ('13, 9)
V 軍艦常磐にて ('13, 9)
VI 顔 ('13, 12)
朝 ('14, 3)
途上 ('14, 3)
それ音がする ('14, 7)
リ博士の死 ('14, 8)



戰報 ('14, 8)
繫累 ('14, 9)
用事 ('14, 9)
あるじや ('14, 9)
食客 ('14, 9)
書齋にて ('14, 9)
絕叫 ('14, 9)
陸橋にて ('14, 8)
齒 ('14, 10)

PETIT BOURGEOIS ('14, 12)
NATIONAL READER ('14, 11)
自己 ('14, 12)

身邊近事 ('13, 8——14, 12)



大正四年三月十五日印刷
大正四年三月十八日發行

定價金八拾錢

著者 土岐善麿

東京市日本橋區檜物町九番地
發行者 西村寅次郎

東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地
印刷者 佐藤保太郎

著作權所有
街上不平

發行所 東雲堂書店
東京市日本橋區檜物町九番地
電話本局一八七一・振替東京五六一四

土岐哀果主宰

生活と藝術（月刊）

一千九百十三年九月創刊

東京

東雲堂發行

古書の店尚古堂
旭川市常盤通り2丁目
☎(0166) 23 − 2452